

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02420

研究課題名(和文) 移住および亡命におけるトランスカルチャー・テキスト -文化・文学研究的視点から-

研究課題名(英文) Transculturality in Texts of Exile and Migration. The Perspective of Cultural and Literature Studies

研究代表者

Pekar Thomas (Pekar, Thomas)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：70337905

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：移住に関して、( )移住者の出身地の文化との関係、( )受け入れ先の文化に対して持つ関係、( )複数の文化が混合するハイブリッドな領域の創造という3つの文化人類学的観点で移民テキストを分析し、これらの観点で分析する有効性が確認できた。また、移民テキストと第二次世界大戦中の亡命テキストの分析比較により、双方が文化の境界を越えたトランスカルチャー性を有することが明らかになった。即ち、双方の著者は複数の文化に属し、文化の多重性が特徴となっている。このことから、移住の経験を文学的に表現することに関しては、移民文学と亡命文学との間に明確な線引きはなく、トランスカルチャー文学という概念のもと分析される必要がある。

研究成果の概要(英文)：Under the three cultural anthropological perspectives: a) the relationship of texts with the culture of the migrants' home country, b) the relationship with their culture of reception, and c) the textual creation of a hybrid space in which multiple cultures are mixed, the analysis of the texts in Migration Literature was made and the effectiveness of analysis from these viewpoints was confirmed. In addition, the texts of Migration Literature were compared with the literary texts of exile during WWII. This comparison revealed that both groups of texts share fundamental characteristics, namely that they belong to more than one culture; they are characterized through a multiplicity of cultures. Therefore, there is no clear demarcation between Migration Literature and Exile Literature, and both groups of texts need to be analyzed under the common concept of Transcultural Literature.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：亡命文学 異文化研究 トランスカルチャー文学 文化接触研究 空間 超文化研究 トランスカルチャー性 移民文学

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の出発点は、移住 (Migration) が世界的な問題となっているという事実であった。いわゆる「労働者」の移住として、1950年代に始まったドイツにおける現代の移住の形式は、ドイツ文化と文学を変化させてきた。今日では、ドイツ語による「移民文学」というジャンルが生じている。この移民文学ならびに移民テキストが本研究の対象であり、「移住」の概念そのものを捉える試みから開始した。

報告者は、過去の科研プロジェクトにおいて、亡命文学および亡命テキストの研究を続けてきた。伝統的な亡命文学研究は、1933年から1945年にドイツ語圏から亡命した人々の事例や作品を対象としてきたが、次第に、移住・移民という時事的現象をも研究の対象とするようになってきた。ヴァルター・A・ベレントゾーン研究所のデルテ・ビショッフ教授はその先駆者である。しかし、それらの先行研究では、なぜ亡命テキストと移民テキストを同じ枠組みで分析するのかという点について、理論的基盤が欠けているように思われた。そのため、下記の3つの文化人類学的視点から、亡命テキストならびに移民テキストをトランスカルチャー文学の概念を用いて分析する必要性が生じていた。

### (1) 文化人類学的視点

移住は人類の歴史と同様に古いものであり、真に人類学的出来事である。そのため、移住に関して、①移住者の出身地の文化との関係、②移住者が受け入れ先の文化に対して持つ関係、③複数の文化が混合するハイブリッドな第三領域という3つの文化人類学的観点から考察する必要がある。

### (2) 文学研究的視点

これらの3つの文化人類学的観点から亡命ならびに移住・移民を分析するためには、文学作品ではない日記や手紙などの日常テキストや音声資料も考察の対象とする必要があった。そのため、分析の対象となるテキストは、①移住者の日記や旅行手記、手紙、さらに関係者の口頭による証言も含めた文学作品ではない日常のテキスト、②移住者が執筆した文学作品テキスト、の2種に分類される必要が生じていた。

## 2. 研究の目的

以上の背景から、本研究の目的は以下の2種類のテキストを分析し、過去の科研プロジェクトで進めてきた亡命テキストと、本研究で考察する移民テキストの間の共通点と差異を明らかにすることであった。

### (1) 移民ならびに亡命の日常テキスト、オーディオ資料の収集と分析

亡命テキストと移民テキストの比較を行うためには、まず資料収集が必須であった。ドルトムントのフリッツ・ヒューザー研究所、ケルンの移民のためのドキュメントセンタ

ー・博物館および移民オーディオ文書館などにて、移民の日常テキストの収集を行うこと、また、音声によるデータに関しては、ワシントンのホロコーストミュージアムにてオーラル・ヒストリー・インタビューとして公開されている、ホロコーストを生き延びた亡命者へのインタビューと、移民オーディオ博物館所蔵の移民へのインタビューを比較することが課題であった。

### (2) 移民文学・亡命文学の分析

文学作品の分析に関しては、移民文学として、先の3つの文化人類学的観点にそれぞれ合致する作品を取り上げ、分析すること、また、亡命文学に関しては、リオン・フォイトトヴァンガーのヨセフ三部作 (1932-1942) ならびにトーマス・マンの四部作『ヨセフとその兄弟』 (1933-1943) という二つの重要なドイツ語による亡命小説を分析することにより、移民文学と亡命文学の類似点と差異が明らかにされると考えた。

## 3. 研究の方法

以上の目的に達するため、以下の研究方法を用いた。

(1) 資料収集および分類については、目的の項目に掲げた通り、各文書館を訪れ、資料収集を行い、分類を行った。

(2) トランスカルチャー文学、トランスカルチャー・テキストの定義と応用

収集された移民テキストと亡命テキストならびに移民文学と亡命文学を分析する際、同じ枠組みで比較をするための理論的基盤が必要であった。報告者は、これらのテキストに共通する問題として、移住者の出身地の文化と受け入れ先の文化の文化人類学的現象および複数の文化が混合するハイブリッドな領域に着目した。これらのテキストは、文化の境界を越えており、トランスカルチャー性という点で共通している。トランスカルチャー・テキスト、トランスカルチャー文学の定義をし、トランスカルチャーという観点から文学作品とテキストの分析に臨んだ。

## 4. 研究成果

### (1) 資料収集

資料収集の面では、先に挙げた文書館において、東アジアへの亡命者の日常テキストを収集し、分類および分析を行った。分析結果の一部は本研究期間に発表したが、分類に関しては、現在、論文としてまとめている。これらの作業の結果、難民に関するペーター・キューネ文書館やフルダ大学などにおいて、さらなる調査の必要があることが明らかになった。音声によるデータに関しても、計画通りにホロコーストを生き延びた亡命者へのインタビューと、移民へのインタビューを比較した。この比較から、戦争時の命を救うための亡命と、平時の生活の向上のための移

住という違いはあるものの、移住の経験という点で、両者に共通点があることが明らかになった。この共通点については、論文で分析の成果を発表した。

## (2) 移民文学の分析

移民文学のテキストを先述の3つの文化人類学的観点から分析した。①移住者の出身地の文化との関係については、代表作として、トルコ出身の作家 **Emine Sevgi Oezdamar** の *Mutterzunge* (1990) を取り上げた。この物語で主題となっているのは、題名がすでに示している通り、言語の問題である。主人公は母語であるトルコ語をかたはら労働者ドイツ語と呼ばれた少数派のドイツ語として、ドイツ文化の中でも維持したいと願っている。②移住者が受け入れ先の文化に対して持つ関係については、同化という現象が見られた。例として、シリア出身の **Rafik Schami** の作品 *Vom Zauber der Zunge* (1998) を分析した。この作品はドイツの伝統的なオリエンタリズム描写に従って書かれ、ドイツ人読者の期待に合致している。③複数の文化が混合するハイブリッドな第三領域については、トルコ出身の作家 **Feridun Zaimoglus** の *Kanak Sprak* (1995) を分析した。この作品においては、ドイツ語、トルコ語、アメリカ的な音を有する造語からなる *Kanak Sprak* が作り出されている。これらの3つの例が示す通り、文化人類学的問いは文学の領域においては、言語使用に焦点が当てられていた。

## (3) 亡命文学の分析

亡命文学の分析に関しては、リオン・フォイトヴァンガーのヨセフ三部作ならびにトーマス・マンの四部作『ヨセフとその兄弟』を分析した。両作品とも空間（後述の場所ではないところ）という観点から移住の問題を描出している。フォイトヴァンガーの作品においては、西暦70年のローマ帝国によるエルサレム神殿崩壊によって生じたユダヤ人のディアスポラ問題が描かれており、トーマス・マンにおいては、自分の意志に反して故郷からエジプトへの移住を強制された聖書のヨセフ物語が取り扱われている。フォイトヴァンガーに関しては論文1本、口頭発表3本、トーマス・マンに関しては論文1本、口頭発表2本によって研究成果を発表した。

## (4) トランスカルチャー・テキスト、トランスカルチャー文学の可能性

トランスカルチャー・テキストとは、文化的多重性によって特徴付けられているテキストであると定義できた。文化的多様性の経験について、その経験に一定の距離を置いて文学的手法で表している場合、これをトランスカルチャー文学と呼ぶことができる。

移民テキストと亡命テキストの分析ならびに移民文学と亡命文学の文政の際に主要な問いとなったのは、移住者の出身地の文化と受け入れ先の文化の文化人類学的現象および複数の文化が混合するハイブリッドな領域であった。これらのテキストは、文化の境

界を越えるというトランスカルチャー性という点で共通していた。すなわち、移住の経験を文学的に表現することに関しては、移民文学と亡命文学は暫定的に区別することができるのみであり、明確な線引きをすることはできない。

他方、本研究プロジェクトが進むにつれ、出発点となった文化人類学的問いを空間という観点から補う必要が生じた。その際、空間 (Raum) と場所 (Ort) の差異について論じたミシェル・ド・セルトーの理論を用いた。移住とは、故郷という場所から一時的な「場所ではないところ」への横断と捉えることができる。この「場所ではないところ」は、時の経過につれて、次第に一つの場所、すなわち新しい故郷となる。移住と亡命に関連付けられたこの空間理論的問いについては、2016年のワークショップ、2017年の国際コロキウムで議論を深めた。国際コロキウムの発表は論集として2018年末に出版予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

① Thomas Pekar, *Heimat, Anpassung und Transit in der Literatur des Exils und der Migration. Versuch einer Zusammenführung*, in: Sabine Egger/Withold Bonner/Ernest Hess-Luettich (Hg.): *Transitraeume und transitorische Begegnungen in Literatur, Theater und Film (Cross-Cultural Communication 31)*, Frankfurt am Main 2017, p. 131-144

② Thomas Pekar, *Exilort Am Pazifik. Das Beispiel der Pazifischen Presse (1942-1948)*, in: Johannes Goerbert/Mario Kumeckawa/Thomas Schwarz (Hg.): *Pazifikismus. Poetiken des Stillen Ozeans*, Würzburg 2017 (*Rezeptionskulturen in Literatur- und Mediengeschichte Bd. 8*, hg. v. Mathias Herweg/Stefan Keppler-Tasaki u.a.), p. 321-342.

③ Thomas Pekar, *Die Bushido-Rezeption im nationalsozialistischen Deutschland. Japan und die deutsche Heldenideologie*, in: Steffen Hoehne/Gerard Siary/Philippe Wellnitz (Hg.): *Helden und Heldenmythen als soziale und kulturelle Konstruktion. Deutschland, Frankreich und Japan*, Leipzig 2017 (*Weimarer Studien zu Kulturpolitik und Kulturökonomie Bd. 11*), p. 267-282.

④ [Thomas Pekar](#), Apparate und Koerper: Überlegungen zu Bertolt Brechts Radiolehrstueck *Der Ozeanflug*, in: The Brecht Yearbook / Das Brecht-Jahrbuch 40. The International Brecht Society 40 (2016), p. 52-66.

⑤ [Thomas Pekar](#), Modelle juedischer Identitaet. Lion Feuchtwangers *Josephus*-Trilogie, in: Exilforschung. Ein internationales Jahrbuch. Exil und Shoah 34 (2016), p. 234-252.

⑥ [Thomas Pekar](#), *Thamar* – ein verschwiegenes Selbstportraet Thomas Manns?, in: Neue Beitrage zur Germanistik. Internationale Ausgabe von Doitsu Bungaku Bd. 15 (2016) H. 1, p. 97-111.

⑦ [Thomas Pekar](#), Oeffentlichkeitsinsel ‚Ruhm‘. Querelen um das Erscheinen von Bertolt Brechts *Kriegsfibel* in der DDR, in: Arne Klawitter (Hg.): Oeffentlichkeitsinseln. Literarische Oeffentlichkeit in der DDR. Studienreihe der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistik Nr. 120 (2016), p. 5-19.

⑧ [Thomas Pekar](#), Japanese Ambivalence towards Jewish Exiles in Japan, in: Joanne Miyang Cho/Lee M. Roberts/Christian W. Spang (Hg.): Transnational Encounters Between Germany and Japan: Perception of Partnership in the Nineteenth and Twentieth Centuries (Palgrave Series in Asian German Studies), New York 2016, p. 147-162.

⑨ [Thomas Pekar](#), Die Bereitstellung der oekonomischen Basis fuer Exil und Emigration in Ostasien waehrend des Zweiten Weltkrieges durch juedische Hilfsorganisationen, in: Komenten des Geldes. Oekonomie und Exil. Exilforschung. Ein internationales Jb 33 (2015), p. 185-198.

⑩ [Thomas Pekar](#), Ernst Juengers Altersreisen und seine Altersreisetagebuecher (1965-1990), in: Limbus. Australisches Jb f. germanistische Literatur- und Kulturwissenschaft Bd. 8 (2015), p. 105-124.

[学会発表] (計 11 件)

① [Thomas Pekar](#), [Thomas Manns Beziehung zu Richard Nikolaus Coudenhove-Kalergi im Zusammenhang mit der Entstehungsgeschichte des \*Josephsromans\*](#). トーマス・マン研究会,

2018年3月7日, 龍谷大学

② [Thomas Pekar](#), [Exilforschung als Teilgebiet von Asian German Studies](#). 3. Deutsch-Asiatischen Studententag Literaturwissenschaft, 2017年11月3日, ベルリン

③ [Thomas Pekar](#), [Hybridisierung und Erotisierung des Mythos: Thomas Manns Roman-Tetralogie \*Joseph und seine Brüder\*](#). 第113回トーマス・マン研究会, 2017年10月21日, 長崎市民図書館

④ [Thomas Pekar](#), [Zum Innenraumdiskurs in Robert Musils Roman \*Der Mann ohne Eigenschaften\*](#). Transkulturelle Perspektiven. 国際コロキウム West-oestliche Raumfigurationen: Wohnen – Unterwegssein, 2017年10月7日-8日, 学習院大学

⑤ [Thomas Pekar](#), [Hybridisierung und Erotisierung des Mythos: Thomas Manns Roman-Tetralogie \*Joseph und seine Brüder\*](#). 国際コロキウム Emigration et mythe: l'heritage culturel de l'espace germanique dans l'exil a l'epoque du national-socialisme (1933-1945), 2017年5月18日-20日, モンペリエリ第3ポール・ヴァレリー大学

⑥ [Thomas Pekar](#), [Architektonische Macht im Nationalsozialismus](#). 日本独文学会秋季研究発表会, シンポジウム Architektur als Gestaltungsprinzip des Imaginaeren in Literatur und Kunst, 2016年10月23日, 関西大学

⑦ [Thomas Pekar](#), [Machttraeume und Machträume. Imaginationen des Raums in der Geopolitik](#). ワークショップ West-oestliche Raumfigurationen, 2016年10月15日, 学習院大学

⑧ [Thomas Pekar](#), [Machtraeume und Machttraeume. Imaginationen des Raums in der Geopolitik \(u.a. bei Karl Haushofer\)](#). Asiatische Germanistentagung, 2016年8月23日-26日, ソウル

⑨ [Thomas Pekar](#), [Die Pazifische Presse als Beispiel eines literarischen Zentralisierungsversuchs im Exil](#). Jahrestagung der Gesellschaft fuer Exilforschung: Exil: Marginalitaet und Zentralitet, 2016年7月1日-3日, ウェールズ

⑩ Thomas Pekar, Oeffentlichkeitsinsel Ruhm. Querelen um das Erscheinen von Brechts *Kriegsfiel* in der DDR. 日本独文学会秋季研究発表会, シンポジウム Literarische Öffentlichkeit in der DDR, In der Ferne zuhause - mit Deutschland vernetzt, 2015年10月3日, 鹿児島大学

⑪ Thomas Pekar, Der Pazifik als Exilort. Das Beispiel der *Pazifischen Presse* (1942-1948). Tagung: Poetiken des Pazifiks, 2015年7月23日-24日, ベルリン

[図書] (計3件)

① Kanichiro Omiya, Thomas Pekar (編), Halt, Schritt, Trab, Galopp – Walter Benjamin weiter, tiefer lesen. Neue Beiträge zur Germanistik 16 (2017) H. 1

② Hiroshi Yamamoto, Thomas Pekar (共同作業), Nachleben der Toten. Autofiktionen, hg. von der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistik, Muenchen: iudicium Verlag 2017.

③ Shinji Miyata, Thomas Pekar (共同作業), Verkoerperte Sprache. Rahmen und Rahmenbrueche, hg. v. der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistik, Muenchen: iudicium Verlag 2015.

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

<https://raumfigurationen.wordpress.com>

(Workshop *West-oestliche*

*Raumfigurationen* 2016)

<https://raumfigurationen2.wordpress.com>

(Kolloquium *West-oestliche*

*Raumfigurationen: Wohnen –*

*Unterwegssein* 2017)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

トーマス・ペーカー (PEKAR, Thomas)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：70337905

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：